

平成26年度 学校評価実施報告書

(別添様式3)

3 2回目評価

・重点評価項目について評価・改善していくための個別評価項目の設定 ・各項目にねらいを定めた取組の計画・実施 ・取組結果を検証するためのアンケート項目や各種指標の設定					・アンケート実施結果、その他指標の結果について整理	自己評価	学校関係者評価		
分野	評価項目	自校の取組	アンケート項目・各種指標	アンケート結果・各種指標結果	評価日	評価者・組織	評価日		
1 確かな学力	わかりやすい授業の創造と言語活動の充実 読書の習慣化	・少人数教育の取組 ・全学級の授業研究会 ・ポスター発表会の取組	・ジョイント、ブレジョイントプログラムの結果・公開授業等での意見	・各学年で全市平均を上回る結果であった。頑張り度は各学年上昇した。	⇒	・言語活動の充実を図る授業改善、長期休業中の学習会、2回のポスター発表会などの取組の結果、ブレジョイント、ジョイントプログラムとも、全市平均を上回った。 ・児童の74.7%、保護者の58.6%は「できている」と回答している。	・授業研究会の指導案検討会として模擬授業を入れる。 ・ポスター発表会は、発達段階を考えて、3年生からの実施も視野に入れていく。 ・長期休業中の学習会は継続して実施する。 ・調べ学習用図書を充実させる。	⇒	・ポスター発表会の取組は大変よかった。これからの方に、毎週の読み聞かせだけでなく、学校の図書の整理や本の紹介などをお願いすることも考えられる。 ・少人数による学習の充実を図る。
2 豊かな心	豊かな体験活動の実践 挨拶の習慣化 自律心と責任感の育成を目指した協働活動	・伝統文化や音楽活動を通した学習活動 ・教職員による登校指導 ・児童会による朝のあいさつ運動	・学習活動における児童の変容 ・地域行事への参加	・全学年で2回以上、地域との交流学習を実施。 ・毎月音楽集会を実施。	⇒	・全校音楽集会の取組は、児童の表現力と関わる力を向上させた。また、豊かな感性を育むことができた。 ・教職員、児童会、保護者への啓発の結果、挨拶の取組が一定の成果を出した。 ・児童会を中心としたたてわり活動の中で、規範意識の向上が見られた。	・音楽集会は継続し、更なる質の向上をめざす。同じ曲をじっくり歌うことができるよう、曲数を減らす。 ・全ての児童があいて意識を持って場に応じた挨拶ができるよう取り組む。 ・たてわり活動を通して責任感や達成感の充実を図る。	⇒	・音楽集会は大変素晴らしい。心温まる取組である。 ・子どもが少なくなってきた中で、異年齢集団の活動は大切である。 ・挨拶は、大人が見本を見せるべき。相手の顔を見て名前を呼んで挨拶すれば子どもも返してくれる。 ・総合的な学習の福祉や安全を視点にした取組を継続・発展していく。
3 健やかな体	基本的生活習慣の確立と健康への意識 スポーツへの意欲と体力の向上	・年2回の健やか週間の取組	・子どもは早寝早起き等、健康を考えて過ごしている	・児童の81.8%、保護者の69.0%が「できている」と回答。	⇒	・学年が進むにつれ、就寝時間が遅くなる傾向にある。また、食事と排便と運動のバランスがよくない傾向にある。 ・業間マラソンでは全員が目標に向かって走った。	・家庭への協力を求め、食事と排便と運動のバランスをとる生活習慣の確立を図る。 ・運動に親しむ児童を増やすために、運動部活動の充実を図る。	⇒	・子どもの生活習慣の定着は大人の努力が必要ではないか。 ・遊具の使い方や安全な遊び方についての指導を徹底すること。
4 独自の取組	地域と連携した学び 小中一貫教育(HATT)の充実	・地域に根ざした学習活動の位置付け ・小中合同の授業研究会 ・かがやく丘コンサート ・SSWの小中連携	・学校は地域と連携した取組をしているか、保護者は地域行事に参加しているか	・保護者の76.1%が地域行事に参加。 ・小中合同同和問題指導授業研修会を実施。・小中合同SSWケース会議を実施。	⇒	・全学年が地域と連携した学習活動に取り組んだ。 ・ふれあい活動は、平均20%程度の児童が参加している。地域の協力が大きい。 ・小中連携したSSWのケース会議は今年度初めての取り組みであった。今後も継続が必要である。	・地域の行事に多くの児童が参加できる方法を探る。また、保護者の参加を増やすための工夫が必要である。 ・困りを抱えた子どもを小中連携して見守っていくためにも、小中連携したSSWのケース会議を継続していく。	⇒	・地域との連携を密にし、学年が子どもたちにつけたい力を明確に持つて取り組むこと。 ・小中の授業を相互に参観したり子ども同士が交流する機会を増やすこと。

4 総括・次年度の課題

- ・保護者は学校の取組を評価しておられるが、子どもの実際の姿はまだまだだと評価が低い。つまり、学校は一生懸命であるが、保護者が願う子どもの姿にはまだ達していないということである。学校は保護者とともに、めざすべき子どもの姿を共有化して、学校がすべきことは何か、家庭できることは何か、地域が担うべき役割は何かを明確にして取組を進めていかなければならない。
- ・保護者は、子どもが学校で確かな学力を身に付け、友だちや先生と打ち解け合いながら人間関係を育み生活することを望んでおられる。学級を基本とした学習集団作りや望ましい人間関係作りを進めていかなければならない。
- ・子どもは大人を見て育つ。大人が子どもの見本となる行動が取れるよう、学校・家庭・地域に働きかけいかなければならない。
- ・小中連携は、学習面だけでなく、家庭状況も含めた生活面においても連携を図り、9年間の連続した働きかけを進めていくことが必要である。